

## 農林水産統計の公的マイクロデータとその活用

京都大学 仙田徹志

京都大学 吉田嘉雄

京都大学 松下幸司

我が国の農林水産統計は、歴史的経緯により、数多くの統計調査が実施されてきた。それは戦前期まで遡ることができる。本報告は、戦前期も含めた農林水産統計の公的マイクロデータとその活用について報告を行うものである。

戦前期の公的マイクロデータは、京都大学に移管されている戦前期の農林省農家経済調査が対象となる。戦前期農林省農家経済調査は、1956年に農林省から移管されたものであるが、90年代末より一橋大学との共同研究でその復元によるデータベースの作成が行われている。一方で、マイクロフィルムのデジタルコンバートにより、PC等で閲覧可能な調査票の電子化も行ってきている。

カレントの農林水産業の統計調査については、寄附講座 農林水産統計デジタルアーカイブ講座の設置により、農林水産統計の高度利用にかかわるプロジェクト研究を農林水産省統計部と行っている。そこでは、農林業センサスを核として研究が進められている。

農林業センサスは、1950年に第1回目の調査が実施されて以来、5年ごとに2月1日現在で実施されている周期調査であり、本年2月に2015年センサスの実査が行われた。調査客体は1950年の618万客体（総農家数）を最高に減少傾向にあるが、直近の2010年農林業センサスでも253万客体（同）が調査対象となっている。

農林業センサスは開始当初は農業事業体概念を導入し、2005年からは農林業経営体の概念を導入して再編されてきているが、農林業にかかわる生産活動を行う主体を網羅する形で調査が行われてきた。また、農業生産は土地を根源的生産要素とし、それは生産主体の移動可能性を制約することになるため、理論上は高い精度で個体間のデータリンケージが可能となっている。農林水産統計の高度利用という観点では、第一に、農林業センサスにおける調査客体の複数時点接続の可能性の検討、第二に、農林業センサスと省内他統計調査との連結可能性の検討、そして第三として、農林業センサスと他府省統計調査との連結可能性の検討が考えられる。上記の第一には、農家調査と林家調査の横断面の連結による農家林家としての新たな統計の作成も含まれ、以上の検討結果についても報告する。

〔付記〕本報告は、京都大学寄附講座 農林水産統計デジタルアーカイブ講座におけるプロジェクト研究、JSPS 科研費 21688017、25660179、15K14812 における研究成果の一部である。